

## 授業報告 4

## 英語学習で学生の自主性と自立心を養う

— Reading &amp; Writing III '97 の授業評価を通して —

渡邊 容子 / Mark Caprio

学生の自主的学習意欲は自身からの知的好奇心の昂揚が鍵である。高等教育では教員と学生間における相互責任を分かちあう授業活動が、学習意欲と自己の責任達成感、学究に対する満足感につながると思われる。

この小論では、1997年度の立教大学におけるReading & Writing IIIの2つの授業の自己評価を試みる。又、学生の英語のリテラシー（読み書き能力）強化ひいては内的成長につながる授業追求のため課題を提示し、まとめとした。

## 1. クラスと指導内容

対象となる2つのクラス、国際比較法科と英米文学科の一年生のクラスは、第二学期の開講であった事、数名の帰国子女の受講により、学生の基本的読み書き能力は高く、中級クラスと位置づけられた。そのため、授業活動としては主に、調査研究法（比較、質問紙、面接、体験、文献調査）、視聴覚などの資料収集法、インターネット検索等、英語で行えるよう基本的なり

サーチ法を中心に指導し、レポート作成においては、英語論文形式、書き方、文献参照法を講義指導した。さらに、英語の口頭研究発表の基本的方法にも触れた。

## 2. 学生の授業活動

学生はまず自主グループ編成をし、研究テーマを決定した。各グループのテーマは下記に示す通り独自性に富んでいた。教員に指示され選択したのではない故に、彼らの独創性が現れている。研究テーマ：1.映画鑑賞—海、2.地球環境、3.健康（ストレス）、4.池袋食べ歩きツアー、5.温泉—ストレス解消効果、6.ミュージカル—レミゼラブル、7.イタリア料理、8.女性問題、9.ダイアナの死、10.人種差別、11.不倫問題、12.日米比較論—コミュニケーションと人間関係の相違点、13.映画史、14.死刑、15.チャールズチャップリン、16.火星探検—パスファインダー、17.英語の表現。又、最終的学習課題は次の4点に集約される。学習課題：1.グループ研究調査と自由討論、2.参考文献で

あるブックリポートの提出, 3.グループ口頭研究発表, 4.最終研究レポートの提出。

具体的な授業活動は、主に個々の一週間の活動報告と次週の活動計画などを英語で文章報告させた。教員は授業中グループを巡回し、活動の指針や、インターネットで得られた情報提供、英字新聞の切り抜き、各専門分野の著名人や書籍などの紹介を各グループに行った。学生は常に研究方法や情報収集にとまどい、助言を求めてきた。これは教員にとって知的挑戦であり、自己の読書経験、人生体験、知的活動を総動員して指導する事になった。学生の要望に応えられる資料探しが主な授業準備であり、教員の学生に対する責任と考える。Whole Language Approachを提唱したGoodmanは「教師の役割は学生の言語発達を管理 (control) することではなく、注視 (monitor) することである」と言っている (1985)。monitorとは学生の言語成長を刻々と注視し、それに併せて指導援助する事だと考える。

学生自主グループ活動の下地が前半に整えば、教員は授業中、学生指導やグループ活動への助言を適宜行い、自主的学習を促進することができる。学習の喜びを学生相互で分かち合う事が書く意欲と知的好奇心を高めるとSmithは強調する (1985)。Calkinsは「読みあうことは読書という孤独な作業を友好的共同作業に変える」と述べている (1990)。学生は実際、グループ活動に

よってかなり責任を強いられ、次の学生の言葉はその責任遂行の重さを語っている。「グループ作業は一人でやるよりも負担は軽いと思ったが、ある意味では相談や打ち合わせが必要だったり、責任も「迷惑をかけないように」と大変だった。(法科1年女子)」。学生は共同作業により、責任感と協調性を養ったと思われる。

### 3. 学生評価

学生が提出したブックレポート、研究レポートについての評価は主に内的メッセージ、思考の深さに重点をおいて評価した。又、グループによる口頭発表はチームワークと発表の仕方、英語力を評価した。

又、作文過程の一つ、推敲の繰り返しが、得点加算につながるよう配慮した。教員の内容へのコメント、学生の疑問に対する個人的意見を書く事は、学生の書く意欲を高める。ある男子学生は教員のコメントを読み「そういうことを書きたかったのではない」と、ブックリポートを書き直した。英語の文章でのコミュニケーションを活発化させるには、お互いに書きあう事である。この学生は読み手をはっきり意識し、客観的に書く練習を推敲により自主的に行ったと言える。他の学生は電子メールを教員に送りブックリポートを書いた本の著者の来日講演を聞きに行って感動したと報告した。この学生は自己学習達成を自分の方法で行った。最終的に学生達の内面的成長をレ

ポートにより注視し、その総合点数と総体的な評価を最終成績とした。

#### 4. これからの課題

最後に授業活動の問題点や長所を提示し、自己評価のまとめとする。

課題としては、1.キャンパス内のより豊富な英語環境整備の必要性（図書館やインターネット検索等）2.学生の伝統的学習癖への踏襲、3.グループの欠席者による活動の困難性、の3点が最大課題である。長所としては、学生の学習達成感が高く、英語自由作文を自力で行った自負心が大学生としての自覚を促した点が、最大効果であった。

総体的に学生の最終的学習達成度はかなり高かった。学生も教員も教室内の自由なグループ活動により、協力体制の下、満足した学習ができたと思われる。講義形式や管理授業を好む学生もいた事は、逆に学生の成長と考える。つまり、自由課題学習は、多くの義務

と責任を伴い、講義形式や管理授業よりもさらに困難であると自身が認識した結果である。真の意味で自主学習、自己責任のもとに学習する意義を学生が会得したのではないかと思われる。

(わたなべ ようこ

本学全カリ運営センター非常勤講師  
マーク・カプリオ 本学法学部助教授)

#### 参考文献

1. Calkins, L. (1990) *Living between the lines*, Portsmouth, N.H.: Heinemann Educational Books.
2. Goodman, K. (1985) *What's whole in whole language*, Toronto, Ontario: Scholastic Books.
3. Smith, F. (1983) *Essays into literacy*, Portsmouth, N. H. : Heinemann Educational Books.